

新刊紹介

渡邊大門著 『戦国大名の婚姻戦略』

片 山 正 彦

本稿は、ここ数年精力的に研究成果を発表されている渡邊大門氏の著書の一つである、『戦国大名の婚姻戦略』角川SSコミュニケーションズ・角川SSC新書（二〇一〇年一月十日刊行／定価八一九円・税込）を紹介するものである。

著者である渡邊氏の略歴を紹介すると、関西学院大学文学部史学科を卒業されたのち、放送大学大学院文化科学研究科修士課程を修了された。そして二〇〇五年には、佛教大学大学院文学研究科博士後期課程に入學され、二〇〇八年三月に修了、わずか三年で同大学から博士号（文学）を授与されている。

佛教大学大学院では、戦国期の赤松氏を研究対象と

され、氏の学位請求論文の中間報告会には、ほぼ同時に佛教大学で学んでいた筆者も参加し、多くの新知見を得たことを思い出す。

*

本書では、戦国時代における婚姻関係のいくつかのパターンを取り上げ、その特色を論じ、婚姻を結ぶ戦国大名がどのような事情に置かれていたのかを説明しながら、戦国の世そのものを眺めている。そして、これらの政略結婚への理解をきっかけとして、読者に新たな興味を抱いてもらうことを目的としているという。以下に本書の目次を示し、いくつかの章を採り上げ

て簡単な内容紹介を行いたい。

はじめに

第一章 時代に翻弄された浅井三姉妹―織田・豊臣・

徳川に関わった「江」の婚姻戦略―

第二章 小さき戦国武将の知恵―謀略で成り上がった

宇喜多氏の婚姻政策―

第三章 戦国大名の盟主同士の婚姻―甲駿相三国同盟

の締結と崩壊―

第四章 戦国大名と寺社との婚姻―尼子氏の出雲大社

戦略―

第五章 中小規模の国人が戦国大名となる道―毛利氏

の中国統一と婚姻―

第六章 戦国大名と公家との婚姻―「今川氏と公家」

「秀吉と関白相論」の二例―

第七章 婚姻戦略の終焉―徳川家康と武家諸法度―

おわりに

第一章では「時代に翻弄された浅井三姉妹」として、

主に近江国北部の武将浅井長政の三女「江（こう）」を話題の中心に叙述している。「江」は、二〇一一年のNHK大河ドラマの主人公となっており、今後多くの関連書籍が刊行されると思われるが、本書はその先鞭をつけるものであろう。

「江」について、本書では「織田信長、豊臣秀吉、徳川家康――天下を獲ったこの三武将と血縁者になった女性」とであると紹介される。また「江」にはさまざまな呼称があり、史料中では「於江与君（おえよのきみ）」「達子（さとこ）」「小督（おごう）」「崇源院（すうげんいん）」などと記載されているが、本書では最も普及しているという「江」で統一するという。

本稿でもこれに倣い、彼女についてはひとまず「江」としておくが、本書におけるこのような配慮は、おそらく福田千鶴氏が著された『淀殿―われ太閤の妻となりて―』を意識してのものと思われる、本書にも参考文献として挙げられている。「淀殿」は、浅井長政の長女であり「江」にとつての姉である。福田著書では、生存中の同時代史料を一覧すると、彼女（長政長

女)を「淀殿」と呼ぶ史料は一点も確認できないとし、「淀君」にせよ「淀殿」にせよ、その呼称を採用するには根拠が示されるべきであるとして、彼女の本名でもある「茶々」を統一的に用いることにしたいとしていた。

対して本書においては、「江」で統一するという史料の根拠については不明確である。「江」を彼女の本名として捉えてよいだろうか。「江」で統一するというのは、あくまでも「最も普及している」という、その一点のみである。

筆者が確認したところ、『柳営婦女伝叢』⁽²⁾に所収される「柳営婦女伝系」によれば、浅井長政の三女として「女 名江子 大相国秀忠公御台所 母同上」とある。ちなみに長政長女は「女 始茶々、後称淀殿太閤秀吉公室、秀頼公母堂、母織田右府信長公妹、号小谷御方長政没後、再嫁柴田修理亮勝家、法名常広院殿」とあり、二女は「女 名初 京極若狭守高次室 母同上 法名常高院殿」とある。すなわち史料に忠実に従えば、長女を「茶々」とすると、二女は「初」、三女

は「江子」とするのが適當であろう。⁽³⁾とはいえ「柳営婦女伝系」は、『柳営婦女伝叢』概略によれば「著者を詳にせず 書中『今歳享保十年』と云ひ、又た『当將軍家御尊母淨円院(徳川吉宗の母) 君』ともあれば、記述の年時を曉得すべし」とあり、後世の編纂物であるには違いない。呼称一つをとつても、福田著書における「淀殿」も同時代史料の絶対的な少なさから苦心している様子が窺えたが、おそらく本書における「江」についても同様な様子が窺えよう。

江が秀吉の養女となつたのち、彼女が初めて結婚した相手は、尾張国大野城主の佐治与九郎一成である。二人は、秀吉と家康との対立がピークに達していた天正一二年(一五八四)の早い時期に結婚したとし、本書ではこれを「政略結婚」と捉え、この際の秀吉の思惑を、

(1) 当面、対立する徳川家康・織田信雄への対抗から、立地的にも佐治氏の力が必要であつた。佐治氏には、水軍という他にはない魅力もあつた。

(2) 将来、経済的な利権を得ようとするならば、知

多半島、伊勢灣の海上交通を掌握する佐治氏が必要になると考えた。

と推測している。

この結婚はわずか二、三ヵ月で破綻したが、江の二度目の結婚は、丹波国亀山城主を務めていた秀吉の養子の秀勝であった。秀勝は、秀吉の姉日秀とその夫三好吉房との間に生まれた子であり、この結婚は政略というよりも一族の結束のために用いられたと指摘している。また、江と秀勝がいつ頃結婚していたのか、その時期を示す史料は今のところ見つからないとしつつも、江の離婚後の状況や秀勝の動向などを考慮すると、二人が結婚した時期はおおむね文禄元年（一九二）前後に絞られると指摘されているという。

江の三回目の結婚は、秀勝との死別から三年後、家康の後継者である秀忠とであった。「寛政重修諸家譜」などによると、文禄四年（一五九五）九月一七日、伏見城においてのものであり、ここに秀吉の家康の力関係が推し量られるという。すなわち、天下統一を成し遂げた後、朝鮮出兵には失敗したとはいえ、太閤豊臣

秀吉は依然として権勢を誇っており、ゆえに家康と秀忠の父子は、江との婚姻を受け入れざるを得なかったという。一方で秀吉にすれば、この婚姻は家康との関係をつなぎとめるための政略的なものであったとし、それは家康が実力者であったことに加え、この頃、秀吉が五七歳にして新たに実子（＝秀頼）を得たことと関係が深く、秀頼の今後のことを一番の有力者である家康に託したかったとの秀吉の思惑があったと推測する。

また、江と秀忠の間には千姫が誕生しているが、江は秀吉の養女として嫁いでいるので、千姫は豊臣家と徳川家の間に生まれた子であり、いわば両家の良き関係を示す象徴的な存在であったという。

これらの見解を述べたのち、江の結婚は「政略結婚に翻弄され、また嫁いだ先では短い結婚生活を余儀なくされた。同盟による戦い回避のための婚姻関係であるはずが何度も戦いの中に巻き込まれていった。政略結婚による同盟が、決して平穏な関係を長く保たせるものではないことがみてとれた」と結論付けている。

第二章では「小さき戦国武将の知恵」として、宇喜多氏の婚姻政策を叙述している。本書では宇喜多氏を「備前国（岡山県東部）」を本拠とした中小規模の大名から身を起こし、やがては豊臣家の五大老にまで上り詰めた一族である」と捉えている。当該期の宇喜多氏研究は、ここ数年で急速に進んでおり、^④著者たる渡邊氏の専門とするところでもある。^⑤

本書では、宇喜多直家の婚姻戦略を「血縁者といえる者を送り込んで同盟関係を築くこと」であり、「勢力拡大の手段にしか過ぎなかった」とし、その具体例として天文二〇年（一五五一）に中山備中守信正の娘を妻として迎えたのちの、中山氏乗っ取りを挙げている。またこの他、遠縁の者まで使って周辺の中小規模の領主たちと婚姻関係を結んでいった事例をも挙げた上で「戦国史の中で見れば、こうした一つ一つの婚姻は実に小さいものである。しかし、中小領主に過ぎなかった宇喜多直家は、小さなところから少しずつ成り上がっていくより道はなかった。婚姻は、そのための大切な手段だった」と指摘する。

ただ宇喜多氏を分析する場合、問題となるのが史料的な制約である。多くの宇喜多氏研究者を悩まし、その研究がこれまでなかなか進展しなかった最大の要因である。本書においても「史実としての史料が少ない宇喜多氏であるが、婚姻関係に関しては概ね実態を反映している可能性が高い」として、いくつかの編纂物を材料に宇喜多氏の婚姻関係を分析しているが、「いくつかの編纂物」が「婚姻関係に関しては概ね実態を反映している」とする根拠は不明である。このあたりに関しては、近日中に刊行されるという著書に期待したい。

第六章では「戦国大名と公家との婚姻」をテーマとし、その事例の一つとして、豊臣秀吉の養子となった秀次と一の台の婚姻を挙げている。一の台は、右大臣にまで上り詰めた公家の菊亭晴季の娘であり、本書では秀次が彼女を妻として迎えた理由を、秀吉の思惑と関連づけて推定している。

すなわち、秀吉はもともと尾張国の貧しい出自であるが、「関白争論」問題に乗じて関白に就任した。貧

しい出自であり、摂関家の出身ではない秀吉が関白に

なることは、当時の常識では全く考えられないことである。「関白争論」では、二条昭実と近衛信輔が関白を争ったが泥沼化し、問題はいいに秀吉の許に持ち込まれることになる。この際秀吉は、配下の武將前田玄以と菊亭晴季に相談し、事態の解決を図ることになった。ここで、いったん秀吉を信輔の父近衛前久の猶子とし、関白を秀吉に継がせるとの提案が晴季によってなされた。結果、秀吉は関白争論を契機として関白となったが、そこで秀吉と深いつながりを持ったのが菊亭晴季であり、「対朝廷、对公家という点において、秀吉は晴季を重用することになる。となると、両者にはその関係をより強固なものにする証が必要であった。それが、婚姻関係を通した強固な結びつきである。秀吉にすれば、公家社会に精通した晴季を片腕にしたかったのであろう。逆に、晴季は秀吉の威光を背景にして、公家社会に影響力を行使したかったに違いない。両者の思惑が一致したことで、秀吉の養子である秀次と、晴季の娘一の台が結婚することになったのである

る」と指摘する。

そして「秀次と一の台が結婚した時期は、明確にされていないが、秀吉が関白就任を目論んだ天正一三、四年（一五八五、六）頃が有力視される」とし、「秀吉は朝廷と公家への対策として晴季の協力を得るため、秀次と一の台の婚姻を推し進め」「その意味で両者の婚姻関係は、政略結婚の一環であった」と結論付ける。第七章では「婚姻戦略の終焉」とし、政略結婚の中に生きた徳川家康の人生を振り返りながら、政略結婚の終焉を概観している。

ここでは、秀吉が制定した「御掟」「御掟追加」に盛り込まれる婚姻を制限する規定に対し、家康がそれを守らず他大名との婚姻戦略を進めていった事例を挙げる。具体的には、

(1) 辰千代（後の忠輝・家康六男）と五郎八姫（伊達政宗の長女）

(2) 氏姫（家康の養女）と蜂須賀至鎮（蜂須賀家政の嫡子）

(3) 満天姫（家康の養女）と福島正之（福島正則の

養子)

を挙げ、(1)については家康が東北の有力な大名である伊達政宗との関係を深めようとしたとし、(2)(3)については、蜂須賀氏、福島氏とも秀吉に早くから従っていた者であり、家康は婚姻関係を通して、その鎖を断ち切りたかったと推測している。

また、氏姫、満天姫の二人以外にも家康の養女は数えるだけでも十数名にのぼり、多くは一族や有力家臣から迎えられたとし、この「掟破りの婚姻」戦略によって、関ヶ原合戦での勝利、大坂の役での勝利につながり、家康の天下統一を成し遂げる重要な政権基盤の一つとなったと指摘している。

豊臣氏滅亡直後の元和元年(一六一五)七月に、家康は「武家諸法度」を制定し、大名が無断で婚姻することを禁止した。この結果、大名家では後継者不足となったのではないかと推定し、將軍家を脅かす勢力の削減へとつながり、武家諸法度の制定によって各地の大名の婚姻をコントロールすることに成功したが、それは家康の苦い経験から生み出されたものであったと

結論付ける。

*

『戦国大名の婚姻戦略』と題する本書ではあるが、「婚姻戦略」に注目し、江や一の台など、従来さほど研究が進んでいなかった人物にスポットライトが当たった点については評価できよう。本書では、福田著書のほか、田端泰子著『北政所おね』(ミネルヴァ書房、二〇〇七年)や宮島敬一著『浅井氏三代』(吉川弘文館、二〇〇八年)などの参考文献が挙がっており、新書にありがちな、参考文献が全く示されていない、あるいは近年の研究成果が反映されていない、などということはない。ただ、分析対象となった彼女らについて、本書がこれまでの研究史を乗り越えられたかに関しては、依然として史料的な制約が大きな障害となっており、この点が改めて浮き彫りとなったのではないだろうか。もちろんこれについては、著者自身も本書中に何度か触れており、またそもそも本書自体一般読者向けに書かれたもので、あまり細かに史料価値を

問うこともできないという事情もあろう。

最後となったが、ご高配を賜った渡邊大門氏に深くお礼申し上げる。渡邊氏は、佛教大学への学位請求論文となった赤松氏に関する著書『戦国期赤松氏の研究』（岩田書院、二〇一〇年）を刊行され、今後ますますの活躍が期待される。

なお本稿は、財団法人徳川記念財団よりの助成（第五回「徳川奨励賞」）をうけていること、京都光華女子大学真宗文化研究所学外研究員としての研究成果であることを付け加えておきたい。

（二〇一〇年一月、角川SSC新書、八一九円・税込）

註

（1） 福田千鶴『淀殿——われ大閤の妻となりて——』（ミネルヴァ書房、二〇〇七年）。

（2） 『柳宮婦女伝叢』（国書刊行会、一九一七年）。

（3） 齋木一馬・岩沢愿彦校訂『徳川諸家系譜』（続群書類従完成会、一九七〇年）に所収される「柳宮婦女伝系」も、長女を「茶々」、二女を「初」、三女を「江子」とする。

（4） 畑和良「宇喜多秀家と「鷹」——「千原家記」所収宇喜多秀家判物写について——」（『岡山地方史研究』一一六、二〇〇九年）、森脇崇文「豊臣期宇喜多氏における文禄四年寺社領寄進の基礎的考察」（『赤松氏研究』二、二〇〇九年）、大西泰正「豊臣期の宇喜多氏と宇喜多秀家」（岩田書院、二〇一〇年）など。

（5） 渡邊大門A「戦国初期の宇喜多氏について——文明・大永年間における浦上氏との関係を中心に」（『佛教大学大学院紀要』三四、二〇〇六年）、同B「中近世移行期における宇喜多氏の権力構造」（『美作大学・美作大学短期大学部紀要』五二、二〇〇七年）など。また渡邊氏は、近日中に宇喜多氏に関する評伝を刊行する予定であるらしい。